

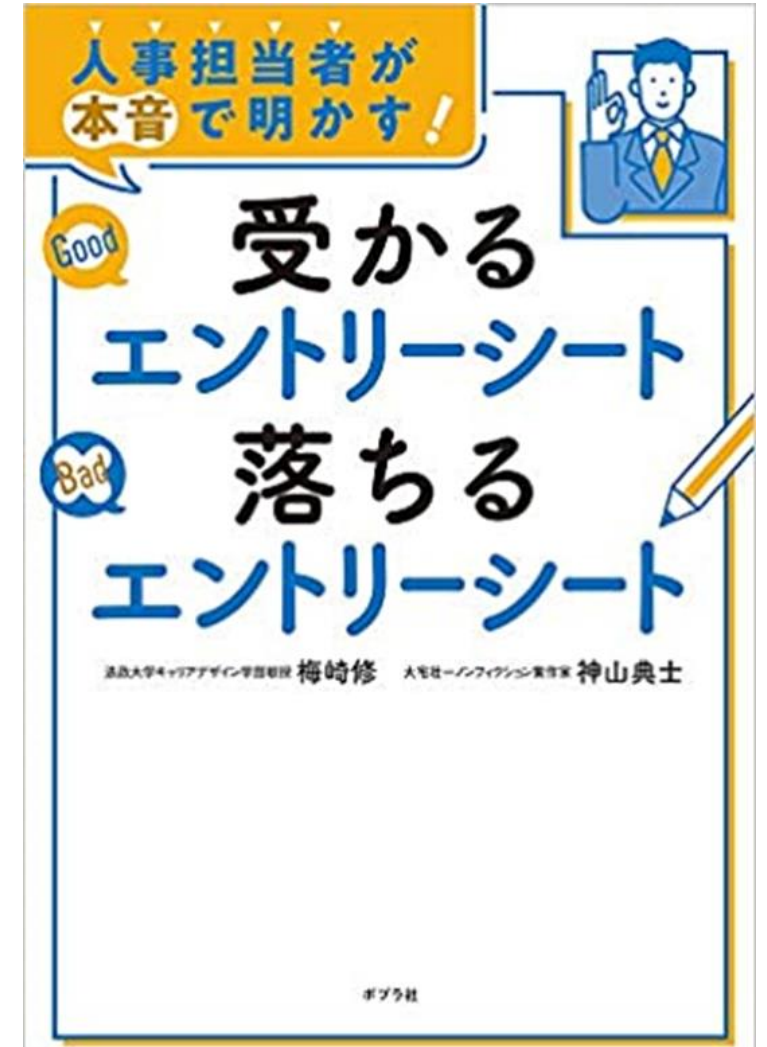
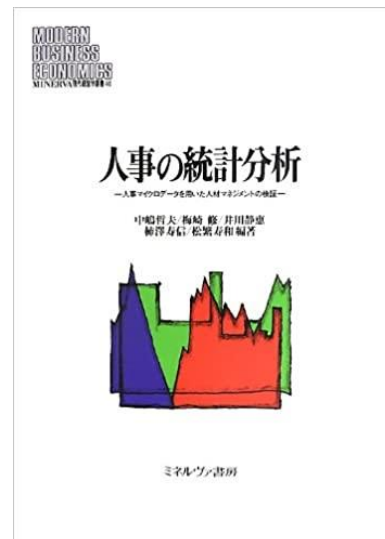
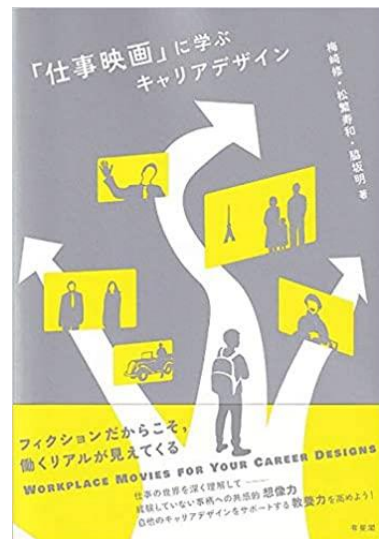
書く力を鍛える

梅崎修

自己紹介

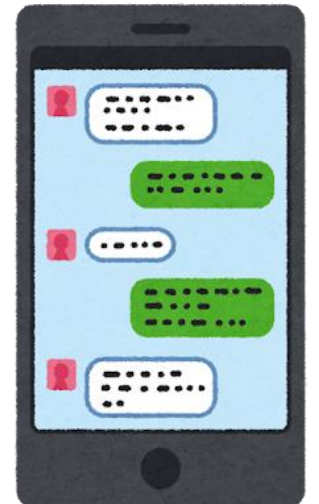
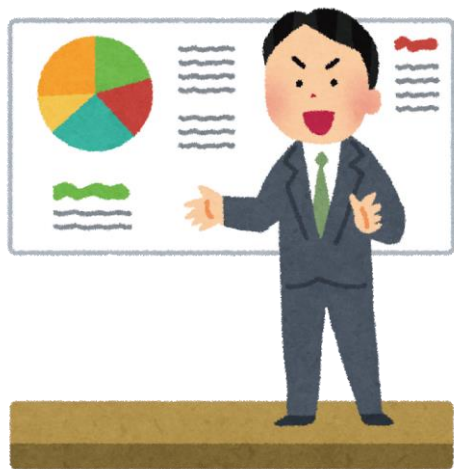
- 経済学者（労働経済学）です。企業内の人事制度や労使関係の実態、歴史を実証的に把握しています。

人事の調査法
= コミュニケーション



「書く力 = 推敲の力」が求められる時代

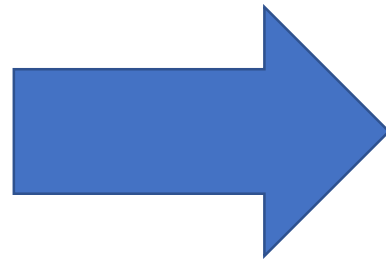
	推敲 (非同期)	即時・リズムカル (同期)
文字あり	書く	話すように書く
文字なし	書くように話す	話す



三つの書く力

「社会常識、知識としての文章力」

エントリーシート以前に、ビジネスマナー
膨大なメールのやり取りをpcで行う準備をする。





誤字脱字がないか。
敬語が正しく使えるか。
語尾が整っているか。
文章に整合性があるか。

「論理的思考力としての文章力」



解釈①

「みんな楽しそうに会話を楽しんでいます」

→ なぜ、集まっているのか？

解釈②

「10年前まではニュータウンと言われていた住宅地の商店街は人通りも多く、にぎわっていました。ところが全国的に少子高齢化が進み、どこのニュータウンでも空き家が増えました。商店街にも人通りが少なくなって空き店舗が増え、いつの間にか過疎化が始まり、コミュニティも崩壊の危機となりました。」

解釈や意見を書けるのか？

「表現力 = 経験が詰まった言葉」で
語る力

ガクチカ

キラキラ体験談

- 「ゼミのリーダーになった」
 - 「サークル（部活動）で優勝した」
 - 「海外留学をして辛い時期を乗り越えた」
- 文末には「苦しさを乗り越えた体験が力になった」とか、「大勢の人の力を借りていまの私があります」といった、「流暢だけれど説得力に欠ける言葉」たちが・・・

「この学生にしか書けない言葉」、
つまり「経験の匂いのする言葉」

人事のプロ、高橋さんの言葉

「毎年ESを見るのがしんどくなっています。本心をいえば、嫌になっていると言ってもいいくらいです。

なぜなら、その多くが書き方のノウハウを教わった文章なので個人的ではなく、**志望企業ウケがいいように書かれた文章**になっているからです。全然、学生個々の顔が見えてこないのです。最近の学生は、ぼくらが学生だったころに比べたら、勉強量は確実に増えていますし、授業にも出席していると思います。大学もそれだけ厳しくなっています。それなのに、その成果を就活に生かしていません。社会人になって活躍することよりも、就活がゴールになってしまっている感じさえあります。

ESは、その企業に入るための入学願書みたいな扱いになってしまい、いいことを書けばよく見られると思っているのでしょうか。ですからぼくは、採用においてESはそんなに重視していません。**むしろその後の面接の素材**として試しています。同じように、ESが採用の合否に直結する企業は少なくなっているのではないのでしょうか」。

梶田さんの言葉

「「就活生の本当の文章力やコミュニケーション能力を見るためには、私たちはESだけを意識してはなりません。**面接に来たときの控室での会話や、そこに至るまでのメールの文章力、表現力などもチェックします。**何気ない会話の中で出てきた『海外に興味がある』とか『将来は故郷に帰りたい』といったような発言にもアンテナをはっています」。

玉井さんの言葉

「ESでは、まず文章力を見ます。**語尾がぶれていたり、敬語の使い方が間違っていたりしたら、弊社の場合はその段階でNG**です。就職活動は就活生にとっていわば『自分の顔』を表現することですし、**営業活動に例えてみたらファーストステップ**なので、就活生側もそれなりに事前に準備をしておくことが大切だと考えています。特に、ESは前もって課題が出されていて、書く時間もあり、対策もたてられるわけですから、それなりの準備がなされた文章でなければおかしいですね」

つづき

「海外留学や、大学のサークルやクラブでのキラキラした活躍はE Sの加点ポイントにはなりますが、弊社の場合それだけを見ているのではありません。**失敗をどう乗り越えたか？窮地に陥ったときに具体的にどういう事実に基づいてどう考え、どう行動を起こしたのか？** そのプロセスを文章に書いた方が、評価点は高くなります」。

梅崎ゼミで行われたES講座

「30歳の未来予想図」を書く

「説明的」でちっとも「シーン＝情景」
が見えてこない表現

- 「きれいなお嫁さんをもらい」
- 「幸せな家庭を築き」
- 「30歳には母親になっていたたい」
- 「家庭を持っていたたい」
- 「ワークライフ・バランスを重視した働き方をしたたい」……。

キムタクのいなりずし

- メロン
- ケーキ

ではなくて、お母さんが作ってくれた「いなりずし」

文章は短文をもってよしとする

- 「つまりは、今現在から新たなコミュニティに飛び込んでいき様々な人とかかわる機会を増やしていき私自身の強みである人の気持ちを読むことを継続してやっていくことが、私が30歳になったときに人事部署の一員として社員を交えていける存在になるための道であると思います。」

→ 一行20文字の原稿用紙で考えて、3行以上になったら「句点（。）」で区切る

非の打ちどころがない文章の弱さ

「私は30歳になったときに、仕事の場でも家庭でも信頼され、必要とされるような大人になっていきたいです。具体的には仕事の相手にも家庭にも誠実で真摯に向き合うことで、会社の業績を向上させたり家族を幸せにできたりするような人になりたいです。
(中略)

まず仕事面においては、どのような部署やチームに配属されることになっても、同僚やお客様との繋がりを大切にし、「この仕事には××が必要だ」と思ってもらえるような存在になりたいです
(後略)」

のっぺらぼうさん

「「私は30歳になった自分をイメージしたとき、全体的に人生を楽しんでいるだろうと予想する。今の友人、世話になっている人たちとは縁を切らずに、定期的に会う機会をつくっては元気をもらっているだろう。自分の時間もしっかりと確保し、娯楽に浸ることもあるはずだ」

自分だけの経験を自分の言葉で

「私の親戚の叔父は、肺がんと診断されたあとも『どうしてもこのプロジェクトだけは自分がやりとげなければ』と家族を説得して仕事を続け、ついに××の仕事を完遂しました。もちろんそのことで十分な治療が受けられず、結果的に寿命を縮めてしまったという面は否めませんが、私はそれくらい仕事に打ち込んだ姿は美しいと思いました。叔母もそのことには納得し〜」

上っ面の知識より深い知識を！

「私が30歳になる10年後には、科学技術も著しく発達して、機械化が進み、今では想像できないような世の中になっているだろう。（中略）働き方の面で考えていくと、10年後には今ある職業から多くの職がなくなっているだろう。そんななかでも残り続ける職として、人間の感情や人の心に寄り添うもの、また創造性が必要なものが挙げられる」

→「10年後の技術の進展により、街の本屋さんが生き残れるか。福岡の13坪の「小さな総合書店」が元気である。その成功の理由は、経営学におけるファンベース理論である。私が目指す正体の仕事とは、〇〇書店さんのようなファンを引き付ける魅力を・・・」

嘘ではないが、**お話**であるべき

- ESは、その後の面接に続く、「手紙」です。ただ書くのではなく、「読者」に向けて書くことの繰り返し
- 書いたものを、読者になって読んでみよう。推敲をしてみよう。
- 就活中に成長する。読者 = 人事担当者と思って試行錯誤。

会話から対話へ

- 日頃から両親や家族、あるいは近しい友人などと「仕事とは？」「家族とは？」「どんな人生が送りたいか？」といったテーマで「対話」をする習慣を持つ。
- 「対話」とは、「会話」とは違って、異なる意見をぶつけあい、より上位の意見にたどり着く会話のこと。そうやって、日常的に思考力を鍛えておくことが大切なのです。
- <読者>が書き手を鍛える。